

一九八二年一月二十八日、福岡サンパレスホール。初来日したヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団の会場総練習の直前、コンサートマスターが立ち上がり「きょうは素晴らしいマエストロとの大切な演奏会。気合を入れて臨もう」と呼びかけた。指揮者は渡邊暁雄（一九一九―一九〇）。フィンランド人を母に持ち、シベリウスをはじめ北欧音楽の熱心な伝道者として知られていた。終演後、「普段は感想を言わない主人が『きょう

芸文 百話

はうまく行った」と満足していた」と、信子夫人は振り返る。

ドイツやフランスでは、民族色濃厚なシベリウスの評価が意外に低い。「日本人はマエストロ・ワタナベの功績で、英国人と同じかそれ以上に熱く、早く受け入れた」との伝説はピアノリストで作曲家のオリ・ムストネンら、渡邊を直接知らない世代のフィンランド人音楽家にも浸透している。

大柄な体と穏やかな物腰の組み合わせはフィンランド譲り。「指

日本のマエストロ ③ 情熱秘す紳士・渡邊暁雄

揮台の紳士」そのものだったが、内に秘めた情熱の激しさもまた、敵しい自然に鍛えられた北欧人に通じた。ドイツ音楽偏重の日本楽壇にあって、戦後いち早く（五〇年米ジュリアード音楽院へ留学。帰国後の五六年にNHK交響楽団の対抗馬として、日本フィルハーモニー交響楽団を創設した。



ヘルシンキでシベリウス像と＝撮影・木之下 見

フィルはめきめき腕を上げた。ステレオ録音のシベリウス全集を世界に先駆けて完成させ、北欧音楽は渡邊と日本フィルの象徴にもなった。だが、その真価は北欧に安住せず、日本や米国の作曲家、フランス近現代の音楽など、老舗のN響が軽視した非ドイツ系や二十世紀の作品を積極的にとり上げた点にある。東京都交響楽団の音楽監督・常任指揮者を務めた七〇年代の七年間は、まだ演奏機会の少なかったマーラーの交響曲の連続演奏に挑んだ。

上品さがアタとなり、体育会系の熱血指揮者を好む楽員に物足りないと思われ本番もあったが、八八年にがんと闘いを公表、最後の二年間は取りつかれたように日本フィルを指揮した。渡邊にとって新しいレパートリー、ブルックナーの交響曲へ歩みを進め、周

練習で声を荒らげる瞬間は皆無だったが、バイオリンの名手として鍛えた耳の良さ、米国仕込みの合理性で音程やバランスを粘り強く整えた。「もつときれいに弾け！」と怒鳴る代わり、「なんて美しくない音でしょう」と諭される方が楽員には応えたらしく、日本

曲を一つずつ、取り上げたい」と漏らしていた。九〇年一月の日本フィル定期、「第七番」の演奏会は、その最初で最後の本番となった。